３５「ポロ・モンタニェス」Polo Monta es

キューバの国民的歌手である。どこにでもいそうなおじさんだ。

多分、日本で知る人は少ないのではないかと思う。２，００１年の年末、キューバに旅行したときに知った。この時は家族と一緒だった。

何ともいえない哀愁のある歌声で、妻とも「いいね」とピタリ意見が一致している。

その彼の死を、なぜか２，００７年２月１０付けの Cuba-Junky（キューバ関連情報誌）で知った。大きなショックだった。

『ポロ・モンタニェスは逝ってしまった』

カリスマ歌手は２，００２年１１月２０日の交通事故で亡くなった。

医師の懸命な努力の甲斐なく、キューバの近年最もカリスマ的な４７歳の歌手フェルナンド・ボレーゴ〈ポロ・モンタニェス）はカルロス・J・フィンレー陸軍病院で、１１月２６日午後１１時２０分に亡くなった。彼の死は、ハバナからピナル・デル・リオ県サン・クリストバルの彼の家に戻る時、１１月２０日水曜日に起こった悲惨な交通事故によるものだった。

それは人々にとって、重篤状態を知らせる分刻みのニュースに苦悶した１週間だった。

昼も夜も島の端から端まで、キューバの人々は結束し、熱心に彼の回復を祈った。しかし彼は、深刻な脳の外傷による危篤状態から生還することはなかった。

日刊グランマは国内外から、ポロの輝きに満ちた、音楽の功績に対する多くの賛辞を受け取った。

死の少し前に届いたイタリアからの手紙は、次のように彼を表現している。

「彼のように謙虚で平凡な人こそ、すべての人の愛情を勝ち取るすべを知っている。彼はすべての人の心の中にあり、私達は彼を誇りに思っている。」

ポロ・モンタニェスはキューバの音楽シーンに突然現れた。

２，００１年後半、彼は「Un monton de estrellas（ウン モントン デ エストレージャス/星輝く山（？）」でキューバ・ラジオステーションのヒットチャートのトップに立った。

最初のＣＤ「Guajiro Natural（グアヒーロ　ナトゥラル/素朴な農民）」は、キューバのみならずコロンビア大衆の圧倒的な支持を得るとともに、他のラテンアメリカの国々と西ヨーロッパに浸透していった。彼の愛国心はアントニオ・ゲレーロ（アメリカで投獄された５人のキューバ人の１人）の詩をもとにした音楽の創作に導き、民衆の心をとらえていく。

彼の世界的な成功は、「素朴な農民の語り」にインスピレーションを受けたもので、キューバ音楽の頂点に立つものである。

ポロ・モンタニェスは、エル・ブルギートと呼ばれるキューバの田舎町で１，９５５年に生を受けた。彼が１０歳の時、父のバンドでトゥンバドーラ，マラカス，マリンブーラなどの楽器を学んだ。彼は小さい頃から働き始め、数年の間に多くの仕事を経験した。

例えば、農場でトラクターの運転や乳搾り、そして木材伐採、それは長時間の重労働だった。しかし夜になると彼の特技を活かして、家から家へと歌って歩いた。

１，９９４年に彼は木材伐採の仕事をやめ、ラス・テラーサスの豪華なホテルで歌い始め、すぐに実力が認められて専属の歌手になった。

ポロはこの時にレパートリーを増やしていった。“ポロ流にアレンジ”されたボレーロ，ソン，クンビア，グァグァンコーなどである。

この「木樵あがりの歌手」は自分の持っている音楽の流儀を決して変えなかった。

音楽は彼にとって、家族と同じくらい大切なものだった。彼は事実上、一度も山にある自分の家を離れたことがなく、従って彼の音楽は島（キューバ）のどこでも聴くことができたというわけではない。

彼の音楽は山の“音”、魔法の“音”であり、言わばとても心地のよい“Guantanamera”グアンタナメラ（キューバ人にとって最も好きな歌）だった。

ポロはとても素朴で、控えめで、心溢れる詩人だった。彼の音楽は伝統的な方法では分類することができない。その音楽は、彼の年輪によって力強さに溢れ、マレコン通り（海に面したハバナの繁華街通り）に来てはすぐに消えていく、つかの間の流行とは全く関係ないものだ。

もし、ポロの曲１曲だけあげるとすれば、それは「グアヒーロ　ナトゥラル」だろう。詩は次のような内容である。

私はシマロン山から来た素朴な農民、
私は自分の置かれた環境を知っている、
私は自分がどこから来たのか知っている、
私は“荷車を引く牡牛”のような環境から来た、
私は炭とサトウキビの匂いを嗅ぐ、
私は必要なら飛行機に乗ることができる、
でも必要なら私はいつでも戻ってくる、
私には何の迷いもない、
何ら迷いはなく、笑いと幸せへのアイデアはある

２，００１年１２月２５日、私は、ポロ・モンタニェスの曲に出会った。

ハバナのチャイナタウンで食事をして、ホテルに戻ろうとしてタクシーを拾った。偶然カーステレオから流れていた音楽がとても良かったので、「何という曲ですか？」と運ちゃんに訊いた。

これがポロ･モンタニェスとの出会いだった。後でＣＤを買ってわかったのだが、このとき流れていたのは、彼の最初のＣＤ１曲目「Amanece el nuevo año」（アマネセ･エル･ヌエヴォ･アニョ/新しい年の夜明け）という曲で、ハバナ一日目の幸運な出会いだった。

彼の死を知ったのは２，００７年だったが、彼の曲に出会ってから 1 年も経たない２，００２年１１月にはもう亡くなってしまっていたのだった。それだけ日本ではなじみのない歌手だったのである。

嬉しいことに、ポロの歌は U-Tube で聴くことができる。ステージや民衆の間で歌っている姿が見られるのはありがたい。

①「グアヒーロ　ナトゥラル」

３組の複弦を持つキューバ独特のギター「トレス」の間奏に痺れる

http://www.youtube.com/watch?v=gjZ-LBfEOCU

②「アマネセ･エル･ヌエヴォ･アニョ」

今でも最も好きな曲、タクシーの中で初めて聴いた

http://www.youtube.ug/watch?v=0MmEdeM2YBw

③「ギターラ・ミア」

２枚目アルバムのタイトル曲、とにかく聴いてみて欲しい

http://www.youtube.com/watch?feature=endscreen&NR=1&v=rAeuuolHZtI

彼のＣＤアルバムは『グアヒーロ　ナトゥラル』と『ギターラ ミア』のたった２枚、２０曲にも満たない。できれば、もっともっと彼の歌を聴きたかった。

ハバナ マレコン通り

ハバナの街は、いたるところで生演奏の音楽が流れている。キューバ人の音楽センスは抜群、レベルも最高。そしてキューバは、マンボ，ルンバ，サルサなどずっと新しいリズムを生み出してきた。

それだけにプロのミュージシャンになるのは狭き門で、街には観光客相手の実力プロが多い。

マレコン通りを歩くと、コロニアル風のカラフルで重厚な建物が整然と続いている。

しかし近づいてみると、海風を受けた建物の風化が甚だしいのは少し哀しい。

ハバナは陽気な人、陽気な音楽が溢れるが、私としてはなぜか哀愁を感じる街であった。

（２，０１２．０３．２２）